

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

欧州の芝平地シーズンが終わると、何人かのトップジョッキーが来日して短期免許を取得し、日本を拠点に騎乗することが近年の恒例行事となっている。一部の関係者からは、日本人騎手で良いではないか、との声も上がっている一方、勝たせてくれるなら騎手の国籍は問わないという関係者も多い。

そんな、この時季頼りにされる外国人騎手の中でも今、「助つ人」、「優勝請負人」として最も熱い信頼を寄せられているライアン・ムーアが、今月のこのコラムの主役である。

ライアン・ムーアは、1983年9月18日生まれの30歳。父はトップトレーナーとして活躍したゲイリー・ムーアで、ジェイミー、ジョシュアの2人の弟も障害の騎手として騎乗している競馬一家の出身だ。騎手デビューは16歳の時で、ライアンも当初は障害を中心に騎乗していたが、02年から平地一本に絞り、デビュー4年目の03年に年間59勝を挙げて見習い騎手チャンピオンの座に就いている。

ノットナウケイトでG1インターナショナルSを制しG1初制覇を果した06年、23歳という史上2番目の若さで全英リーディングの座を奪取。ニユーマーケット・スタウトと騎乗契約を結んだ08年と、翌年の09年の通算3回、英國騎手部

門首位の座に就いている。

10年、スノーフエアリーでG1英オータスを制し英国3歳クラシック初制覇を果たすと、翌日のG1英ダービーもワーカーでG1ゴールドC、ダックでBCフィリー&メアターフ、マジシャンでBCターフを制覇するなど、相変わらず決めるべきところでビシッと決める騎乗を見せている。常に冷静沈着で、どんな大舞台に臨んでも顔色ひとつ変えないライアン・ムーアを、地元英國のファンは“Ice Cool”と呼ぶ。スノーフエアリーでオーファス制覇を果した直後のインタビューで、ニコリともせず「これ、ダービーではないですかね」と言い放ったのは、有名な逸話である。

それだけに、13年のジャパンCをジエンティルドンナで制して引き上げてきた際に、関係者と握手をしたライアンが一瞬笑顔を見せる、歐州から來ていた出走馬関係者や報道陣の間で「ライアン・ムーアが笑った」と、大きな話題になつたほどであった。

もっとも、レース後の記者会見はライアンらしきが全開だった。ある日本人記者

が、「ジエンティルドンナが海外に挑むとしたら、どのレースを目標にするのが良いか」と尋ねた時のことだ。どこに行つても通用するとか、凱旋門賞を勝てるとか、普通ならば景気の良い話が出るところだが、ライアンの場合だと「歐州の馬場はタフ。秋のロンシャンはことさら向かないし、アスコットの12Fもの馬にはタフ。行くとしたらG1インターナショナルSでしょうが、あのレースは賞金が安い」と、トーンの上がらぬことこの上なかつた。

その、あくまで冷静沈着なライアン・ムーアが、一度だけ顔色を変えた場面を、筆者は目撃したことがある。舞台は11年のG1英ダービーで、ライアンの騎乗馬は1番人気に推されていたカールトンハウスマダービーでは、それだけでも大変な重圧がかかる場面だったが、カールトンハウスの馬王が誰であろうエリザベス女王で、キングジョージもオーファスも勝つことのある女王にとって悲願のダービー初制覇がかかつた一番だったのである。英國の全国民が女王のダービー制覇を望む中でスタートしたレースで、カールトンハウスは勝ち馬から頭+3／4馬身差の3着に惜敗した。ライアン・ムーアも英國人だ。負けられない一戦での惜敗に、引き揚げてきた彼の顔色は真っ青で、表情はこわばり切つていた。あんなライアン・ムーアを見たのは、後にも先にもあの時一度きりであった。